

に南海大地震のことが出ていた。室戸の灯台まで水がきたとあり、津波で海岸も全滅とあったので、うちの寺もやられたかと思ひ、絶望的になった。何回も帰してやるのだまされ、二十二年十月、帰国のためナホトカへ。ここでは民主化運動が盛んで、反動分子のつりあげや、にくまれていた者は密告されて、人民裁判にかけられた。なかにはまた奥地へ逆戻りする者もあって、一日一日が戦々きょうきょうの連続であった。やっと十一月二十日すぎに乗船したが、帰る気持ちがいかなかった。そして二十七日、舞鶴港についた。

## 穴倉生活数年

滋賀県 寺村 芳郎

昭和二十年八月二十二日、松花江をソ連軍が上陸用舟

艇でやって来ました。二日間ほど戦闘を交えました。先任中尉の戦死以外被害者は少なかつたようです。その後、原隊に帰り、牡丹江で武装解除を受けました。

十一月六日、ダモイ東京と言われ、喜んで貨車に乗り込みました。中は二段になっており、小さな天窓が一つあるだけの不安いっぱいの出発でした。どこを走っているのかサッパリわからず、指揮官に尋ねても知らないの一点張り、機関士に聞いても自分の運転区間より知らないようでした。が、列車は休みなく西へ西へと走っておったわけでした。

十日ほどたつて駅へ着きました。大きな海が見え、それがバイカル湖であることを知ったのはあとのことでした。そして一日中湖辺を走って、二十日間ほど行った森で下車、これがラーダの森でありました。収容所は独ソ戦当時の兵舎で、屋根だけ地上にある穴倉でした。宿舎の天井裏にライオンハミガキの使い古しがありました。これがだれの使ったものであつたか、あるいはノモンハンンの日本兵のものであつたか、不明でした。

その中にソ連の兵隊が、この兵舎にはドイツ兵が二千

人ほど入っておったのだが、全部銃殺されてしまった。お前たちもそんな運命に遭うのだからと言っていたのを思い出します。

十一月になるとともに、一面氷が張ってきました。作業は電話線の埋設の仕事でした。深さ約一メートルほど掘下げ、幅二メートルで掘り進むのです。途中、石畳の舗道があり、それを取り除くのに大変苦勞をいたしました。ソ連の地方人は化粧石けん等、日用品を欲しがって寄ってきておりました。これを歩哨は追い帰してはおりましたが、彼らの物資不足は深刻の様子でした。

ある日、私たちの仲間が長靴をとられたとの申告があり、収容所へ帰ってきたところ、所長より今日作業に出た者は全員広場へ集合させられ、その前に歩哨全員を並べ首実験せよとのこと。そのうちの一人に容疑がかけられ、全員の前で射殺されました。我々の面前でこれが行われ、全くびっくりいたしました。

食事といえば五分がゆ、昼食はパン二百五十グラムくらいです。朝食のときに昼のパンも同時に食べてしまうので、昼は水を飲んでしのいだものです。昭和二十一年

の元旦と五月一日に米のご飯の支給があり、ニシンの頭つきが一匹ずつわたり、喜んで食べました。しかしその晩、胸がやけて眠れないので水道の水を飲んだところ、その水が悪く、たくさんの者が熱を出して作業を休みました。腸チフスと診断されました。所長が驚いて中央より医師団を呼びよせ、治療に当たったものの、約二か月の間に六百八十人が死亡しました。

幸いにして私は元気でしたので、元気な者五百人くらいで伐採作業に狩り出されました。私は当番として全員の洗濯を引き受けましたが、これは大きな鍋で煮沸消毒をするわけです。シラミ退治の方法でした。

八月末に帰国の命令が下り、ナホトカへ到着しました。私は、帰国後十二指腸潰瘍にかかり苦しみました。これは抑留中の不振生が原因であるとのことであり、後遺症の一つであります。